

氏名（本籍）	ヒ 日	ダカ 高	キョウ 杏	コ 子	（東京都）
学位の種類	博士（美術）				
学位記番号	博美第92号				
学位授与年月日	平成13年3月28日				
学位論文等題目	論文 16世紀後半から17世紀前半イングランドの刺繍における 金色と黒色についての色彩文化史的考察				
論文等審査委員					
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	小町谷	朝生
（論文第1副査）	”	”	（ ” ）	越	宏一
（副査）	”	”	（ ” ）	宮下	安弘
（ ” ）	”	名誉教授	（ ” ）	高橋	彬
（ ” ）	日本女子大学	教授		小笠原	小枝

（論文内容の要旨）

「16世紀後半から17世紀前半イングランドの刺繍における
金色と黒色についての色彩文化史的考察」

本論文では、16世紀後半から17世紀前半にかけて、イングランドで作られたと見なされている刺繍作品の金色と黒色を色彩文化史の面から分析する。目的は、刺繍に使われた色彩の意味を当時の社会状況と照らし合わせて検討することによって、色彩の象徴的使用の特質を見出し、社会での色彩が持つ視覚言語的变化を構築することにある。つまり、本論文は色彩文化史の一方法論として、イングランドの地域的特質を顕著に表す事例として、刺繍に用いられた色彩について検討し、そのもつ意味の変遷の論述を試みたものである。

本論文内容は以下のような構成となっている。

第1章では始めに、刺繍とユダヤ・キリスト教の関係について述べ、次いで刺繍が社会的媒体化したことを述べる。ユダヤ教にとって刺繍された幕で礼拝堂を装飾することと、刺繍された祭服を身体につけることは、旧約聖書に記される律法の一部として神聖な意味を持つ。彼らの刺繍の伝統は、キリスト教徒にもコプト裂やタペストリーの形で受け継がれた。15世紀まで刺繍の表象志向は、ローマ・カトリックに支配されていたが、16世紀後半以降のプロテスタント国家への改宗により、イングランド独自の色彩とデザインへと変容していった。さらに上流階級子女が教養として刺繍作品を作り、イングランド人の国民的嗜好を表す一つの媒体という位置付けを持つようになった。

第2章では、材料である金色と黒色の系の生産について述べる。ヨーロッパ大陸からイングランドへ移民してきたユグノー教徒の職人達等の手によって、金色系がイングランドで国産化されるようになったことにより、さまざまな社会的問題が起きていた。また、黒色系は高価なもので

あったが、新大陸から輸入された染料によって、16世紀後半以降、安価に生産できるようになった。

第3章では、生産に関連した専売特許について述べる。国王と貴族達は豪華な染織品を身にまとったり、住居を装飾するような生活を維持する経済的後楯として、専売特許の保持に懸命だった。特にこの時代に生産・消費量の多かった金色系と黒色系の専売特許は、国王と貴族の利権に大きく関与していた。

第4章では、刺繍デザインのモチーフをトレース、もしくは印刷した下絵から分析し、さらに刺繍技法を概説する。さらに16世紀後半から17世紀前半の作例として、練習帳という機能を果たすサンプラーを扱う。

第5章では、金色と黒色の配色について検討する。刺繍の主体としての金色はローマ・カトリック教徒とローマ主義者と呼ばれていた一部のイングランド国教徒にとって豪華さと栄光の表象と見なされてきた。一方、黒色地に置かれた金色の配色は、スペインのイエズス会修道士達から由来した洗練さを示唆した。イングランドにおけるスペインの影響を見ることのできる刺繍例として、ブラック・ワーク（スパニッシュ・ワーク）と呼ばれる一群があり、そのモチーフには動植物と蔓草文様が多く見られる。

第6章では、黒色のみが示す意味の変化した理由を検討する。新約聖書でキリストが成した十字架上の贖罪を通じて律法が破棄されたことにより、律法を守るためにあった刺繍幕や祭服は不必要とプロテスタント主義者が主張し、結果として礼拝堂と祭服の刺繍装飾と付随する聖人像が取り除かれた。偶像を一切否定した地上におけるエルサレム回復という、清教徒の掲げるシオニズム的理想の表れが黒色だった。イングランドとオランダを中心としたカルヴァン主義プロテスタント信徒、いわゆる清教徒の衣服を通じて、黒色は彼らの精神を象徴する色彩となり、「簡素さと純粹さ」という新たな意味を付された。

第7章では、金色の刺繍について検討する。ローマニズムのイングランド国王や司教達において、「絶対王政の栄光」を顕示する対象となった。また、一般個人のための服飾品、または個人の紋章を印した室内装飾品に多くの金色系が用いられることとなった。刺繍は元来、ユダヤ・キリスト教の伝統のみを装飾する手だてだったのにもかかわらず、ルネサンスの影響により、刺繍で表す対象に異教混交が起きたのである。その典型的事例として、イングランドの絶対王政の黄金時代を飾ったスペクタクルの一つだったマスク（Masque）を挙げうる。ユダヤ・キリスト教が偶像と見なしてきたギリシャ・ローマ神話の神々を、祝祭劇として国王と貴族達が金色の刺繍をふんだんに施した扮装によって演じた。これら金色を使った刺繍の濫用の背景には、イングランド王室とイングランド国教会のローマ化という理想があったが、結果的には偶像観や理想の方向性の異なる清教徒の反撥を招いた。

第8章の結論では、これら金、黒二色によって、当時のローマ・カトリック、反宗教改革のスペインイエズス会、イングランド国教会、清教徒のキリスト教徒が各理想を視覚言語化し、色彩の社会的意味を拡張させていたことを述べる。

内 容 目 次

要 旨	3
関連事項年表	4
はじめに	6
第 1 章 刺繍とユダヤ・キリスト	9
第 1 章 第 1 節 刺繍とユダヤ・キリスト教の律法	9
第 1 章 第 2 節 宗教改革とカルヴァン主義、反宗教改革	10
第 2 章 金色の糸の生産と黒色の糸の染色法	15
第 2 章 第 1 節 金色の糸の生産	15
第 2 章 第 2 節 黒色の糸の染色	19
第 3 章 金色の糸・黒色の糸の生産に対する専売特許（独占権）	21
第 3 章 第 1 節 金色の糸の専売特許	21
第 3 章 第 2 節 黒色の糸の専売特許	22
第 4 章 刺 繡	24
第 4 章 第 1 節 刺繍の装飾文様とモチーフ	24
第 4 章 第 2 節 刺繍の技法	28
第 4 章 第 3 節 サンプラー	31
第 5 章 金色と黒色の配色 - スペインとブラック・ワーク -	40
第 6 章 黒色の検討 - 清教徒 -	47
第 7 章 金色の検討	51
第 7 章 第 1 節 個人の服飾小物に使われた金色	51
第 7 章 第 2 節 マスクに使われた金色	59
第 8 章 検 証	68
結 語	71
謝 辞	73
参考文献	74
別冊図版	